

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 7 日現在

機関番号：32605

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520585

研究課題名(和文) ろう児の書記日本語教育におけるマルチリテラシー概念の有用性

研究課題名(英文) Research on the Effectiveness of Multiliteracies in Teaching Written Japanese to Deaf Students

研究代表者

佐々木 倫子 (SASAKI, MICHIKO)

桜美林大学・言語学系・教授

研究者番号：80178665

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語の読み書きに終始してきた従来のろう教育に対し、「マルチリテラシー」概念の有効性をまとめ、検証するものである。本来音声言語である日本語を、主に視覚的モードから習得する場合、文字だけでなく、映像や絵画・イラスト、グラフ・表など、マルチモーダルに意味を読み解く力を養うことの重要性、書記日本語と日本手話との間にある、言語の階層差からの脱却への有効性がまとめられた。先行研究をもとに、ろう教育との関係性でとらえた成果を、口頭発表、出版などで発信した。ただし、教育実践に基づく実証面では、主に、携帯メールによる日本語作文、静止画を用いた批判的リテラシーの育成例にとどまった。

研究成果の概要(英文)："Multiliteracies" encompasses more than just the "reading and writing ability of a language". Deaf children in Japan have to learn to write Japanese through a written process without benefit of spoken language instructions. Research has shown that the multiliteracies theory has made important contributions to the acquisition of critical Japanese language literacy by utilizing various visual modes, such as written characters, video, photographs, cell phone emails, paintings and illustrations. A continuing challenge has been the limited actual application of the theory to educational practice.

Multiliteracies research also shows that this concept is effective in overcoming the hierarchy difference between the Japanese language and Japanese sign language. Research findings have been published in academic journals and have been presented at both domestic and international academic society meetings.

研究分野：日本語教育学

キーワード：ろう児 書記日本語 日本手話 マルチリテラシー マルチモーダル ろう教育

1. 研究開始当初の背景

ろう教育は21世紀に入り、2007年の盲学校・聾学校・養護学校の特別支援教育への一本化、人工内耳手術等の普及による音声言語重視の方向性などから、形を変えた口話教育の進行もあり、教育の専門性がいっそう低下しつつある。そのため障害が聴覚だけにとどまる子どもの保護者はろう教育を見限りつつあり、結果的に多くのろう児が聴覚に障害をもつ子に対する準備のない普通学校に進む。そこでは聴覚障害はほぼ考慮されず、挫折感・孤独感を深め、自尊感情を失う状況に追い込まれてしまう。ろう児の親の90%以上は聞こえる人、つまり、聴者であり、手話もできなければろう文化も知らない。また、それらを学ぶ機会も整っていない。そのため、保護者が我が子の将来を考えたとき、日本語の習得のみを視野に置きがちで、結果として、我が子が日本語能力にも手話能力にも限界を持つだけでなく、親子間にも大きな断絶を生じてしまう事態を引き起こしている。

本研究はそのようなろう児をとりまく言語環境と教育のあり方を背景として開始した。

2. 研究の目的

本研究は、ろう児に対する書記日本語教育のあり方を考え、日本手話を基盤とし書記日本語とあわせて授業言語とする学力育成に新しい方向性を見出すことを目的とする。その出発点として、ろう教育の現状の整理は当然であるが、それに加えて1990年代後半のニューロンドングループ提唱のマルチリテラシーの概念を取りあげた。概念の整理、その後の脱構築の主張などの加わり、また、21世紀に入り、活発な進展を見せている、リテラシー研究全般の成果を含めた上で、ろう教育のあり方との関係を明確化し、現状に対して新たな提案をすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は以下の手順で進めた。

- (1) 理論的基盤であるマルチリテラシーズ、および、ろう教育に関する先行文献の探索・整理をおこなう。
- (2) 従来のろう教育を踏まえた上で、研究協力校における授業観察をおこない、その上で、新たなリテラシー教育の提案をおこなう。
- (3) 研究協力校の教員の協力を得て、マルチリテラシーズを意識した教育プロジェクトの実施、記録、分析をおこなう。
- (4) 海外の、ろう教育先進地域とみなされる地域にある、ろう学校の調査をおこない、結果をまとめる。
- (5) 種々の調査結果に基づき、ろう教育がかかえる困難点と今後の方向性をまとめる。口頭および論文による研究発信をおこない、本研究に反映させて最終的なまとめとする。

4. 研究成果

以下に、得られた研究成果を、手順の分類に従ってまとめる。括弧内には研究成果のうちの項目部分を主として含む出版物を挙げたが、このほかに口頭での発信をおこなった。

- (1) ろう児・者の置かれた社会的状況、日本におけるろう教育の流れ、マルチリテラシーズ分野における先行研究の文献的探索・整理をおこない、その骨子をまとめ出版した。(図書(3)(4)(5)論文(3)(4))
- (2) 従来型のろう教育における過剰な日本語偏重、読み書き偏重を踏まえた上で(図書(1)(2)、研究協力校において、日本手話と書記日本語を授業言語とする授業を観察・分析した。ろう児が多様なリテラシーを手段とし、また、目標として育てる現状を観察し、まとめた。(図書(3)、論文(5))

リテラシーの基本である表記の教育は当然研究対象に含まれる。日本語の表記システムは、ローマ字、平仮名、片仮名という表音文字と、漢字という表語文字の4種類の文字

体系がそれぞれ異なる特徴と機能をもって組み合わせて使用されるため、どの母語を持つ学習者にとっても複雑で困難であるとされる。そんな中で、ろう者はビジュアル・リテラシーの高さから漢字を得意とするとされるが、本来音声言語である日本語を音声なしで学ぶことの課題は大きい。本研究の調査で扱った手書き作文の表記の誤用 100 例の分析からは、形の類似性に起因する文字の混同、文字の細部にこだわらず、大ざっぱな画像でとらえることに起因する文字の混同と作字が特に多く見られた。文法の誤用においても、日本手話の負の転移がかなり見られた。本研究では、教育の役割を、単に誤用例への対処とするのではなく、日本手話と日本語とのコミュニケーション・パターンの違いに立脚するリテラシーの差異をより認識し、組み入れることの重要性を指摘した。(論文(2))

(3) 就学年齢に達した日本のろう児には、2010 年代の現在、三つの選択肢がある。(難聴学級を含む) 近隣の普通校 2 万校のひとつに入学するか 日本語を基盤とする 87 校のろう学校のひとつに入学するか、日本手話を授業言語とし、書記日本語とのバイリンガル教育を提唱する、ただ 1 校の私立ろう学校に入学するかである。近年のろうの小学生の就学分布を見ると、が増加の一途を示し、普通学級はもとより、難聴特別支援学級の在籍者も 2008 年に 900 人台に乗って以後も順調に増え続け、2013 年度は 989 人となっている。のろう学校生は減り続け、2014 年度にはついに 2000 人を切って、1999 人となり、重複障害の在籍も多い。は 30 人台を推移している。本研究の研究協力校はのバイリンガル校である。本研究では、多様なリテラシーを意識的に取り入れ、その育成をはかる教授方法を提案した。そのひとつに、携帯メールプロジェクトがあり、その試行、結果分析をおこなった。(論文(5))

(4) 国内においても、あわせて日本手話クラ

スを持つ公立ろう学校の見学をおこなったが、海外のろう教育において先進的な面を持つ、オーストラリアのろう学校と香港のろう幼稚園の調査をおこなった。そして、特にオーストラリアの事例を、カナダのろう教材とあわせて、参考としてまとめた。(図書(1))

さらに、国内におけるろう教育の困難点とあわせて、トランスランゲージング理論を取り入れた教育方法を中心に、今後の方向性をまとめた。聴者の教師が日本手話の熟達者であることも、ろう生徒が聴児なみの日本語能力を持つことも要求されない中で、各生徒が自身の持てる言語能力を最大限に発揮しつつ、その言語能力・学力を伸ばす方向は、行きづまりに悩む日本のろう教育の現状において、模索する価値のある方向だとするのが本研究の主張である。そして、ともすれば手話つきスピーチ/日本語対応手話に走りがちで、多くのろう学校に対して警告を発することも、本研究の重要な役割であった。(論文(1)図書(2))

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 5 件)

(1) 佐々木倫子「バイリンガルろう教育実現のための一提案 - 手話単語つきスピーチからトランスランゲージングへ -」(査読有)『言語教育研究』第 5 号、桜美林大学大学院言語教育研究科(pp.13-24(85 ページ中))2015 年 3 月 31 日

(2) 佐々木倫子・岡典栄「日本手話話者と中国語話者の日本語リテラシー 表記と文法に着目して -」(査読有)『桜美林言語教育論叢』第 11 号、桜美林大学言語教育研究所、pp.1-13(164 ページ中)2015 年 3 月 31 日

(3) 佐々木倫子「 . バイリンガルろう教育と MHB 研究会」(査読無)2014 年『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』10 周年記念号 (母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究会 pp.20-24(145 ページ中)2014

年 3 月 31 日

(4) 佐々木倫子「多言語世界へのまなざし[9] 手話という危機言語」(査読無)『英語教育』12、大修館書店、pp.68-69(104ページ中) 2013年12月

(5) 佐々木倫子・鈴木理子「教員間協働によるろう児の携帯メールプロジェクトの検証」(査読有)『桜美林言語教育論叢』第9号、桜美林大学言語教育研究所、pp.15-23(160ページ中) 2013年3月31日

[学会発表](計8件)

(1) 佐々木倫子・岡典栄「中国語話者と日本手話話者の日本語リテラシー 統語と表記に着目して」(査読有)(研究発表)第10回国際日本語教育・日本研究シンポジウム(香港大学 香港)2014年11月15日

(2) 佐々木倫子「発表1 ろう者のマルチ・リテラシー」、長谷部倫子「発表2 ろうの小学生の複数言語環境と日本語習得」、佐藤啓子「発表3 ろうの中学生に対する日本語教育」、若月祥子「発表4 日本語学習経験を持つ韓国人ろう者のライフストーリー」(査読有)(パネル発表)『ろう者の複数言語環境が示唆する日本語教育の課題』日本語教育学会秋季大会(富山国際会議場 富山県富山市)2014年10月11日

(3) 佐々木倫子「マイノリティ言語話者の複言語環境の厳しさ ろう者の場合を例に」(講演)「複言語時代の言語教育研究会」(桜美林大学四谷キャンパス 東京都新宿区)2014年9月20日

(4) 佐々木倫子「バイリンガルろう教育とMHB研究会」中島和子・カルダー淑子・清田淳子・大山全代・湯川笑子『母語・継承語・バイリンガル教育研究の軌跡と展望』(パネルセッション)2013年度母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究会10周年記念大会(大阪大学箕面キャンパス 大阪府箕面市)2013年8月17日

(5) 佐々木倫子・あべやすし、川島清、木村哲也『障害とコミュニケーション - 社会がうみだす情報弱者の視点を中心に』(パネル発表)「日本語政策学会第15回大会」(桜美林大学町田キャンパス 東京都町田市)2013年6月2日

(6) SASAKI, Michiko & SUZUKI, Satoko “Utilizing Cell Phone Text Messaging as a Learning Tool for Japanese Deaf Children” 3rd International Conference on Sign Linguistics and Deaf Education in Asia (ポスター発表)(査読有)(香港中文大学 香港)2013年2月1日

(7) 佐々木倫子「携帯メールから作文へ ろう児のリテラシー育成を考えるー」國學院大學日本語教育研究会(招へい講演)(國學院大學 東京都渋谷区)2012年11月17日

(8) 佐々木倫子・中山慎一郎・森壮也・岡典栄「聴覚障害者のコミュニケーションと手話の法的位置づけ」(パネル発表)「日本語政策学会第14回大会」(麗澤大学 千葉県柏市)2012年6月10日

[図書](計5件)

(1) 佐々木倫子「ろう児への複数言語導入」『ことばの教育を問い直す 8つの異論をめぐって (森住衛教授退職記念論文集)』pp.155-164 三省堂(印刷中)2015年4月刊行予定

(2) 佐々木倫子「第1章 手話と格差 - 現状と今後にむけてー」『言語と格差』明石書店、pp.12-28(236ページうち17ページ)2015年1月31日

(3) 佐々木倫子(編著)「序 少数派のリテラシーと社会参加」第12章 マイノリティと多様なリテラシー「あしがき 当事者と非当事者の協働」『マイノリティの社会参加 障害者と多様なリテラシー』くろしお出版 pp. iv-vi、pp.197-218、pp.219-220(222ページうち27ページ)2014年4月2日

(4)佐々木倫子・岡典栄(編)木村晴美・森壮也『ろう者から見た「多文化共生」』(DVD 1)ココ出版 2013年

(5)佐々木倫子・岡典栄(編)久松三二・田門浩『ろう者から見た「多文化共生」』(DVD 2)ココ出版 2013年

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐々木 倫子(桜美林大学・言語学系・教授) SASAKI, Michiko

研究者番号: 80178665